

派遣者番号	29K22	氏名	兼元 由香利
研究主題 —副主題—	総合的な学習の時間のカリキュラム・マネジメントを通じた若手教員の授業力向上 —単元構想から—単位時間の授業づくりまで—		
派遣先	早稲田大学教職大学院	担当教官	田中 博之
所属校	板橋区立板橋第二小学校	校長	田中 豊一

キーワード：総合的な学習の時間 授業力向上 エビデンスベース OJT 指導 若手育成

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

東京都の公立小学校では団塊世代の教員の退職に伴い、新規採用教員が多く配置され、学校現場では若手教員が占める割合が年々増加している。こうした状況下において、若手教員が数年の若手教員育成研修を終える頃には、新たに教職に就く教員の良きモデルとして、指導する立場としての教員の力量が求められる。このように経験の浅い教員であるにも関わらず、他の教員への指導が求められるという実態は決して珍しいことではない。

平成32年度(2020年度)より施行される新学習指導要領では、急速に変化する予測不可能な未来社会において自立的に生き、社会の形成に参画するための資質・能力の育成と、それを社会と共有、連携する「社会に開かれた教育課程」が重視された。各教科の目標及び内容においては、(1)知識及び技能、(2)思考力・判断力・表現力等、(3)学びに向かう力・人間性等の3つの柱で再整理し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。これは現行の総合的な学習の時間の目標である「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力の育成」と「問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協働的に取り組む態度を育てる」と合致するものである。総合的な学習の時間ではこうした資質・能力の育成をねらいとし、他教科に先駆けて実施されてきた。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善について田村(2015)は、「主体的・対話的で深い学び」それぞれの具体的なイメージを明確にすることが重要であるとしている。さらに学習過程、プロセスそのものを重視していくことが大切であるとも述べている。こうした総合的な学習の時間を理解した上で若手教員自らが実践し、総合的な学習の時間の良さを自覚することは、児童の成長のみならず、若手教員の授業力向上にもつながるものである。

そこで本研究では、総合的な学習の時間を軸にし

ながら、育成すべき資質・能力を踏まえ、「主体的・対話的で深い学び」の授業力を身に付けることが、若手教員の総合的な学習の時間における授業力のみならず、今求められている授業力の向上に寄与するものと考え、本主題を設定した。

2 研究の内容・研究の方法

(1)総合的な学習の時間のカリキュラム・マネジメントをフェーズ化したOJT指導の実施

総合的な学習の時間の指導力を高めるには、様々な実践モデルに出会い、モデルを通して教師自身の授業イメージを確立させていくことが授業力を高める上で最も有効であると考えている。本研究では若手教員が総合的な学習の時間の趣旨や内容の理解を深める段階から多くの実践モデルを知り、単元計画から一単位時間の授業づくりまでの一連のOJT指導を段階ごとに分け(フェーズ化)、若手教員の実態や求めに応じて柔軟に対応しながら指導した。

(2)「授業力自己診断カルテ」を活用した振り返りと「形成的授業診断OJTシート」を活用したエビデンスベースによるOJT指導

「授業力自己診断カルテ」の作成 東京都教育委員会が示している授業力向上のための「『授業力』自己診断シート」を参考に作成した。そのままでは設問項目の汎用性が高く、総合的な学習の時間ならではの特性が薄かったため、筆者のこれまでの学びの中で体験的に得てきた知識と経験を踏まえ、総合的な学習の時間の内容項目を新たに設定した。

「授業力自己診断カルテ」の活用 若手教員には授業実施後すぐに、授業自己診断カルテへの記入をお願いした。授業終了後の鮮明な状態で授業を振り返ってもらいたかったからである。授業での気づきを記録することで自覚させ、課題の明確化を図った。さらに、継続して取り続けることで、若手教員の変容を見取る手だてとし、学びの軌跡として蓄積した。また、授業力の向上を若手教員自らが自覚すること

で授業に向かう前向きな姿勢を引き出せると考えた。

「形成的授業診断OJTシート」の作成 総合的な学習の時間の展開は様々である。授業者や児童が違えばそこで重ねられていく日々の学習活動は唯一無二であり、学級の数だけ学びが存在する。その上、本時を綿密に計画していても授業中の児童の様子によって展開を変えなければならなくなることもある。そのような側面をもつ授業を分析し、指導するには幅広い視点で授業を参観し、実態をよく捉えた上で指導、助言を行う必要がある。そこで、様々な視点で多面的・多角的に授業を分析できるよう40の授業参観評価項目を設定した。また、項目に沿った指導、助言を行うことで、無責任な指導や助言を除外することができ、指導内容の所在を明らかにする意味もある。

「形成的授業診断OJTシート」の活用 授業を参観して気付いた点を示し、改善に向けた具体的な指導方法や手だてを助言する。その後指導を受けた若手教員が自己の気付きや感想を記入し、次時で改善したい自己の課題を決める。この一連の流れに沿ったOJT指導により、サイクルとして連続的、継続的に取り組めるようにした。ここで注意したいことは経験年数の浅い教員に一度に多くの課題を指摘すると、教員としての自信や授業に向かう意欲を損なう可能性があることである。この問題を回避するため、次に挙げる三つの手だてにより、指導の効果を高めた。

- ①若手教員自らが自己の課題を捉え、次時の目標を立てることで授業改善に向けた主体性を引き出す。
- ②授業改善に向けた若手教員の努力や変化を私的的確に見取り、称賛しながら授業力の高まりを自覚させ、その積み重ねで自信を付けていけるよう配慮した意図的な指導を行う。
- ③若手教員が客観的に自己の課題を捉えられるように、動画や写真を見ながら行うエビデンスベースのOJT指導を実施する。

3 研究の結果

(1) フェーズ化したOJT指導の実施について

【本実践を終え、実施した若手教員へのインタビューより】
・「まだ自信はないが、総合のイメージはできた。児童と共に授業をつくるという視点をもって授業を考えることができたようになった」「これまでは気付けなかった児童の様子や変化に気付けるようになった」と振り返った。
本実践でねらいとしていた総合的な学習の時間の正しい理解と「主体的・対話的で深い学び」の授業改善について、若手教員が実践を通して学び得ていること、またその土台となる児童理解への深まりを感じ取ることができる。
・若手教員は、私によるモデル授業の参観を通して、『総合的な学習の時間は、児童が自分の考えを出し合って、みんな

で学びを創っていくもの』、『みんなで良い学びを創っていきましょう』と話し、「児童にとって安心感のある授業が、私のモデル授業の中で展開されていたことが単元全体の土台となっていて、授業を引き継いだ後も児童の主体性を引き出した授業を展開することにつながった。」と振り返った。

総合的な学習の時間の指導に不安を抱いている教員には、モデル授業の実施が教員だけでなく、児童にも総合的な学習の時間のイメージをもたせることができ有効であった。

・児童に向けた田中(2016)「A.Lチェックシート」の結果から、多くの児童の単元を通して自己の成長を自覚していることが分かった。中でも顕著であったのは、主体力、協働力と成長力の伸びが大きかった。このことから担任のみならず、児童にも学びと自己の成長への気付きを見取ることができた。

(2) 「授業力自己診断カルテ」「形成的授業診断OJTシート」を活用したOJT指導について

・「授業力自己診断カルテ」の「児童主体の活動となるように配慮された声かけ、かかわりができた」の項目について若手教員がある時を境に達成を実感するようになり、「児童を信頼して授業が行えるようになった」と自己の内的変化を振り返った。「形成的授業診断OJTシート」と照合するとそのときから若手教員の指示や声かけが「問い」中心になり、教員主導の関わりが極端に減っていた。それは指導観の変容を裏付けており、授業力の向上による自信の表れであると捉える。

4 研究の考察

・総合的な学習の時間のカリキュラム・マネジメントを通じたOJT指導により、若手教員に「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の重要性に気付かせることができた。児童の実態を捉え、児童の思いや願いを重視した単元計画や授業設計づくりに努める若手教員の授業改善に向けた前向きな姿勢から、OJT指導の一定の成果が得られたと捉える。

・若手教員の授業が教師主導から児童主体へと転換した要因は、児童主体の授業、児童と共に創る授業に挑めるだけの授業力の向上と教師としての自信をつけたことによるもので、若手教員の授業力が高まった結果であると捉える。

・「授業力自己診断カルテ」と「形成的授業診断OJTシート」活用によるエビデンスベースのOJT指導は、授業者の内的変化や指導技術、授業力の向上を図る上で、課題を客観的に捉えさせたり、成長に気付かせたりすることができ、効果的な手だてとなった。

5 今後の展望

このOJT指導の実施には、指導者に一定レベルの総合的な学習の時間の知識と実践力が不可欠であること、また、忙しい校務の中で毎時間の実施は困難であることが分かった。授業映像を効果的に活用してOJT指導の時間短縮を図ったり、複数の指導者で実施したりするなどして指導者側の負担を軽減した汎用性のあるOJT研修の形を今後も探っていきたい。

